

バレーボールに於ける攻撃の一考察

西村 栄蔵・積山 和明

目 次

- I. はじめに
- II. これまでの攻撃について
- III. これからの攻撃について
 - 1. バレーボールの本質的な特性
 - 2. バレーボールの戦術のとらえ方
 - 3. バレーボールの攻撃の戦術体系の志向（思索）
- IV. まとめ

I. はじめに

バレーボールは本来、レクリエーションスポーツとしてスタートしたものであったが、その後の進歩の過程で、ルール、競技方法等の改正が、度々行われ、競技としての形態が整うに従い、技術、戦術にも当然のことながら、多くの工夫、改善が加えられてきた。

そして長い歴史的な経過を経た現在、世界バレーボール連盟の加盟国は、130ヶ国に及んでいる。日本においても、東京オリンピックを契機に男女共、世界のトップレベルに侵出し、それに伴って、各層の競技人口も増加し、確実にバレー王国の道を行んでいるが、しかし男子はミュンヘンオリンピックの優勝、女子は、ワールドカップ東京大会の優勝を最後に、漸次、世界水準のバレーボールから、遅れをとるようになってきた。

その原因については、日本バレーボール協会を中心に日夜議論され、選

手のレベルアップのために、技術、体力の強化、ジュニア対策、指導者育成等が、積極的に行われている。しかし、このような現状の中で、触れられていない重要な分野がある。それはバレーボールの戦術体系を確立することではないだろうか。これまでの指導は、バレーボールの本質的な特性に基づかないで、経験に基づく、現象的、かつ主観的な方法であり、少なくともバレーボールの発展に望ましい影響を与えていない。体系化され、分類された戦術の上に技術を追求するとともに、それらの戦術や技術のトレーニングを追求し、さらにゲームを追求することが必要であろう。

そこで小論は、現在のバレーボールの実態に視点を置き、これまでの主観的な考え方を打破し、わが国や、諸外国ではみられない、バレーボール独自の戦術体系化を運動方法的に試みるものである。

Ⅱ．これまでの攻撃について

これまでのバレーボールの技術、戦術は、多くの場合次の図①、②のように分類されている。

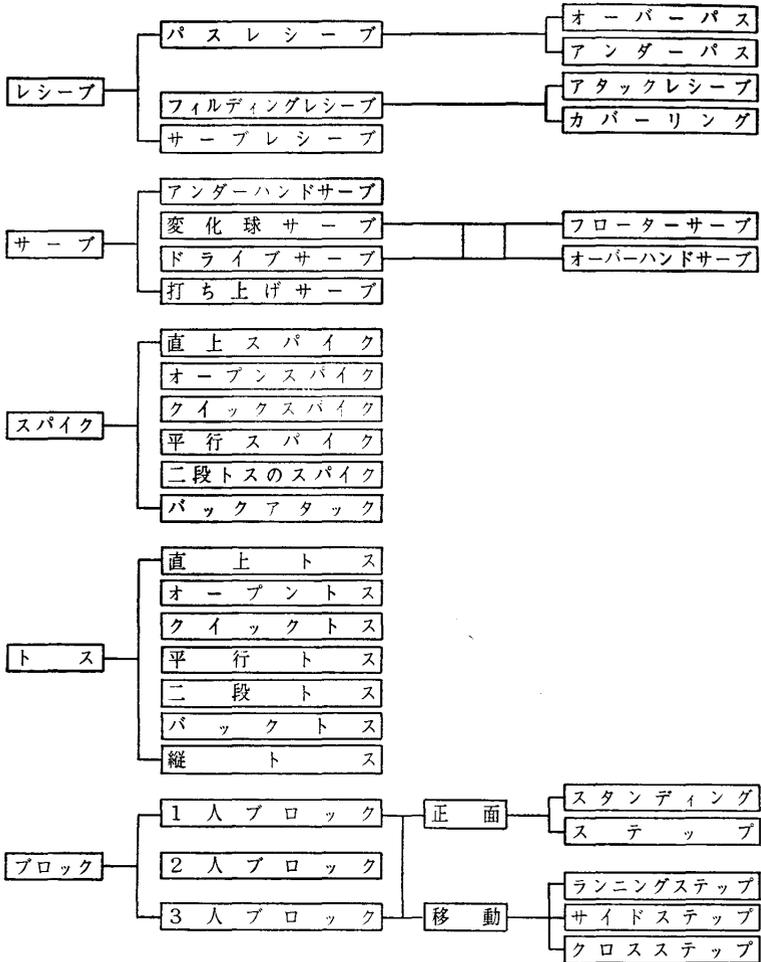
図①は、バレーボールの基礎技術の一覧であるが、これは、基礎技術を、レシーブ、サーブ、スパイク、トス、ブロックに分類している。

レシーブには、パスレシーブ、フィールドイングレシーブ等があり、これらがオーバーパス等や、アタックレシーブ等に発展していることを示している。

サーブには、アンダーハンドサーブ、変化球サーブ等があり、特に変化球サーブとドライブサーブは、フローター式とオーバーハンド式の両方の打法のあることを示している。また、打ち上げサーブには高く打つだけのものと、逆回転で打つものがある。

スパイクには、直上スパイク、オープンスパイク等があることを示し、これらはさらにレフト攻撃、センター攻撃、ライト攻撃、または、バックアタック等の縦の攻撃に発展している。

トスには、直上トス、オープントス等があることを示し、これらもスパ

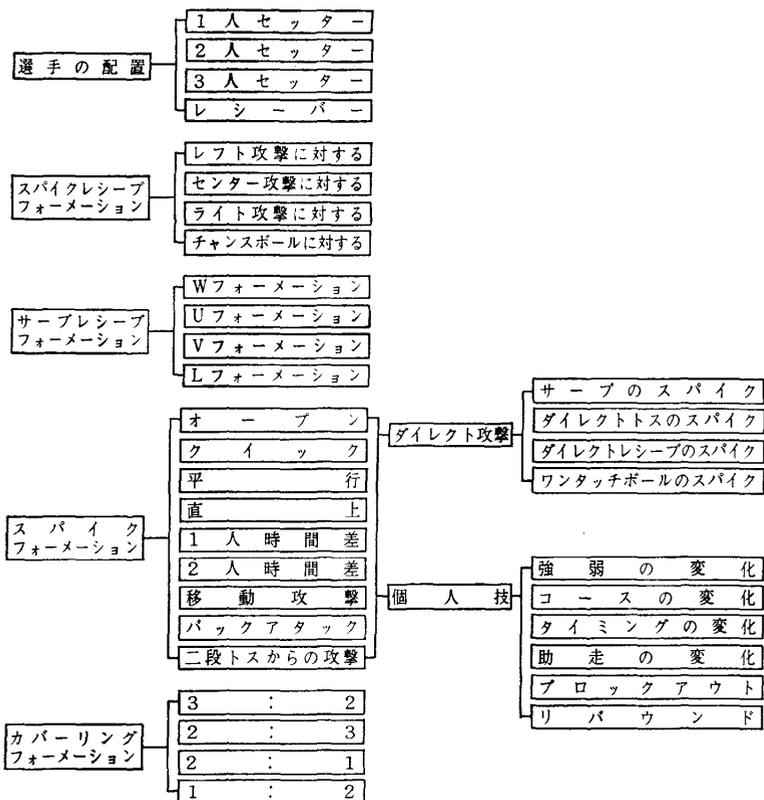


図① バレーボールの基礎技術

イク同様、レフト、センター、ライト、縦のそれぞれのトスに発展している。

ブロックには、正面でブロックするか、移動してブロックするかにより、スタンディングブロック等と、ランニングブロック等に、発展してい

くことを示している。



図② バレーボールの応用技術

図②は、バレーボールの応用技術の一覧である。これは、応用技術を選手の配置、スパイクレシーブフォーメーション、サーブレシーブフォーメーション、スパイクフォーメーション、カバーリングフォーメーションに分類している。

選手の配置には、1人セッター、2人セッター等があり、レシーバーをスターティングメンバーに入れることもあるということを示している。

スパイクレシーブフォーメーションには、レフト攻撃に対するフォーメ

ーション、センター攻撃に対するフォーメーション等があることを示している。

サーブプレッシュフォーメーションには、5人のW型フォーメーション、4人のU型フォーメーション等があり、守備に重点を置いた場合は、W型かU型であり、攻撃に重点を置いた場合は、V型、L型があることを、示している。

スパイクフォーメーションには、オープン攻撃のフォーメーション、クイック攻撃のフォーメーション等があり、自チームのフォーメーションを必要としない、ダイレクト攻撃には、サーブをスパイクする等があり、フォーメーションによって上げられたトスに対するスパイカーの技術には、強弱の変化、コースの変化等があることを示している。

カバーリングフォーメーションには、3：2のフォーメーション、2：3のフォーメーション等があり、ブロックカバー時の選手の配置を数的に示している。

以上のように、これまでのバレーボールの基礎技術、応用技術は、図①、②に示すように分類されているので、これを見れば、基礎技術、応用技術が、どのようなものか、理解できる。

しかし、これは、既述のように、バレーボールの技術の単なる一覧であり、バレーボールの現象面だけを対象にした並列的な技術の図示にすぎない。したがって、例えば、応用技術のスパイクフォーメーションのオープン攻撃とクイック攻撃の関係さえ、理解できず、また基礎技術から応用技術への展開も、系統的な追求は、できない。換言すれば、現状のバレーボール界は、それぞれの指導者の経験の上に、成り立っているといえよう。

そこで、このような並列的分類を打破し、バレーボールの本質的な特性に基づいた、技術、戦術の体系化が必要になってくるのである。

Ⅲ． これからの攻撃について

これからのバレーボールは、基礎技術、応用技術の整理されたものに基

づいて展開するというよりも、技術を系統的に追求することが必要になる。と同時に技術の系統化にあたっては、各戦術を分析し戦術を構成する一般的な原理をとらえ、それに基づいた戦術体系を構築し、練習の系統化を追求する必要がある。このような観点にたつて、バレーボールの戦術ならびに練習法をとらえ、これを平素の練習に生かし、ゲームで活用することが必要になろう。

特に小論は、種々な重要な問題の中で、これまでの基礎技術、応用技術の分類を打破した、バレーボールの攻撃の戦術の体系化のみにとどめる。

1. バレーボールの本質的な特性

(1) バレーボールの攻撃と防御について

バレーボールにおける攻撃と防御の概念は、それぞれ絶対的概念ではない。それは相対概念である。仮りに攻撃の概念が絶対的概念であるとする、攻撃と防御のそれぞれは相互に一方の攻撃と防御のみが存在することになり、ゲームは成り立たなくなる。

つまり、攻撃と防御は相互に排除するとともに、補いあっている。それゆえ一方の概念をとらえると、他方の概念も明確にとらえられるという関係を持っている。このことは、攻撃についての論述には、必然的に防御の論述も相対的に述べられるので、防御についても、明らかにできる。したがって、バレーボールは、常に攻撃と防御を相対的にとらえることが、必要になろう。

(2) バレーボールの得点の方法

バレーボールは、ネット型球技であるが、ネットによって区分された相手コート全体を、ゴール型球技のゴールとして、とらえることもできるので、得点の仕方は、ゴール型球技と共通にとらえられよう。ゴール型球技の戦術の体系化に必要なゴール型球技の本質的な特性は、ゴール型球技の各種の攻防を単純化するとともに、各種の攻防における方法の特性を考察し、とらえたので、バレーボールにおいても同様な方法によってとらえることが必要になろう。

ところで、バレーボールの得点の方法として主要な位置を占めている、スパイク (SPIKE) を、新英和辞典 (研究社, 1971年) によって調べると、「大きく打ちつける, 貫ぬく, 傷つける」という意味に訳されているので、バレーボールでは、ボールの操作者によって、空中にトス (TOSS) されたボールを、味方攻撃者が、相手コートに向かって強くたたき込む得点の一方法ということになる。

また、今日バレーボールの攻撃において、キックスパイク、オープンスパイク等の合成語により、スパイクを分類しているむきもみられるが、これは、スパイクの本質的な動作というよりも、スパイクに結びつくトスの種類により影響されている用語にとらえられるが、スパイクの和訳は、研究社の辞典の通りで、ボールをたたき込むことである。

(3) バレーボールの本質的な特性

バレーボールのゲームの方法を単純化し、ゲームの方法の特徴について考察すると、以下のことがとらえられる。

- ① 6対6のバレーボールを、例えば、5 m四方位のせまいコートにおいて、1対1、2対2の形態によってバレーボールを行うと、相互の競技者は、対峙を打破し得点を試みるので、スパイクを中心にしたプレーの応酬になる。それは、テニスやバドミントンのゲームに似た様相が展開されるので、得点する主要な方法であるスパイクは、バレーボールの本質的な特性のひとつになる。
- ② バレーボールは、常に対峙の打破をし、得点を試みる対人技術である。したがって対人性が、ひとつの本質的な特性になる。
- ③ このような対人技術というものは、基本的には、集団における味方相互の協力の中で行われる。したがって、集団性もひとつの本質的な特性になる。

以上の3つをまとめ、ひとつの概念にすると、バレーボールの本質的な特性は、「対人下における得点する技術、例えばスパイクに結びつく連系的な戦術とその防御」ということになる。つまり、バレーボールの本質

的な特性は、ボール操作者のトスと、これにかかわる味方攻撃者のスパイクを中心にした、2対2の攻撃とその防御ということになる。

2. バレーボールの戦術のとらえ方

バレーボールの攻撃とは、相手との対峙を打破し、相手を弱点のある状態にし、得点を試みることである。つまり、球技の攻撃を構成するといわれている、3つの運動技術のなか、その状態を維持するということを、省いた方法である。

バレーボールは、ネットによって、コートを2つに区分し、相手コートにボールをゲットして得点したり、また相手の競技者がボールを防御できないように攻撃し、得点しているが、このゲームでは、得点方法や、得点に導びく方法が、身体の極所を道具としてとらえ、特定なボール操作法によって、所定の回数内で、しかも相手コートに進入することを禁じられ、相手コートを攻撃するので、攻撃にあたっては、ネットより離れた位置より、ネットに近い位置、つまり相手コートに近い位置からの攻撃が優位になる。すなわち、ネットより離れた位置で瞬時に相手との対峙を打破し得点を試みても、得点するまでに再び、防御に対峙され、得点を阻止されることもみられる。そのため、ネット近くの戦術が、多く見られるが、しかし本質的には、バレーボールの攻撃も他の球技の攻撃と同様に、ネットの遠くから、ネットに近づく戦術と、ネット近くの戦術に、大別することができよう。

また、ボールをネットに近づける方法には、ボールの操作者とこれにかかわる味方の競技者によるパス、またネット近くでは、ボール操作者とこれにかかわる味方攻撃者による、トス、動き、スパイクがみられる。特にボール操作者とこれにかかわる味方攻撃者間のボールの移動は、競技者ではなく、ポジションへの移動になる。

3. バレーボールの攻撃の戦術体系の志向 (思索)

(1) バレーボールの本質的な特性

バレーボールの本質的な特性は、記述のように「対人下における、得点

する技術に結びつく連系的な戦術とその防御」としてとらえられる。

(2) 攻撃の実相

バレーボールの攻撃は、基本的にネットより離れた位置からネットへ近づくと、ネット近くの戦術になる。ネットより離れた位置からネットへ近づくと戦術では、相手との対峙の打破を志向し、容易に得点の可能な位置へのパスになる。そしてネット近くの戦術では、これらのパスを直接得点を試みるスパイク等や、各種の攻撃法に基づいて、得点を試みている。特にバレーボールの攻撃の戦術は、バレーボールの競技の特性により、ネット近くの戦術が主要な位置を占めている。

(3) ネット近くの各種の攻撃法

ネット近くの各種の攻撃法には、クィック法、オープン法、時間差法等がみられる。これらは、味方のパスを受け、トスとこれにかかわる味方攻撃者によるプレーで、それぞれの攻撃法が、並列的にとらえられ、得点されているが、これらの攻撃法は、トスとスパイクが基本であり、これを基礎にして各攻撃法が、系統的にとらえられるように考えられる。特にこのことは、攻撃の戦術を系統的に練習し、各種の攻撃法を身につけるために、必要なことになろう。

(4) 各種攻撃法の体系化の視点

クィック法、オープン法、時間差法の各攻撃法は、一定の視点に基づいて、体系化が可能になる。次にあげるものは、攻撃の体系化にあたり、視点としてとらえられよう。

- ① 距離
- ② 時間
- ③ スピード
- ④ ボールの方向
- ⑤ 攻撃者の動きの方向
- ⑥ 攻撃に関与する人数

(距離は、セッターとスパイカーの距離、時間は、トスをスパイカーが打

つまでの時間, スピードはトスのスピード, ボールの方向は, セッターが上げるトスの方向, 攻撃者の動きの方向は, スパイカーの動きの方向, 攻撃に関与する人数は, セッター, スパイカー, オトリスパイカー等の人数)

例えば, クィック法 (Aクィック=スパイクの中で一番早い攻撃) を①～⑥の視点により体系化すると, 次のようになる。

- ① 距離…短い
- ② 時間…短い
- ③ スピード…トスのスピードは遅い
- ④ ボールの方向…前
- ⑤ 攻撃者の動きの方向…ボールに近づく
- ⑥ 攻撃に関与する人数…2人 (セッターとスパイカー)

従って, クィック法 (Aクィック) は, 各種攻撃法の中で, 最も基本的な攻撃法といえよう。なぜならば, オープン法では, 距離, 時間が長くなり, 時間差法では, 攻撃者の動きの方向が, ボールに近づく者と, 離れる者 (オトリジャンプをした攻撃者) に分かれ, 攻撃に関与する人数も, 3人以上となるからである。

(5) 攻撃の戦術体系

6項目の視点を基礎にして, バレーボールの攻撃の戦術体系化を試みると次の2通りに分類できる。

① 攻撃の基本形態—[I] (仮称)

攻防の関係において, 1対1から1対0の状態を作る攻撃形態で, これは, 自チームのトスを伴わない, ボール操作者のみの攻撃形態である。この攻撃形態を攻撃の基本形態—[I]と仮称する。それは次のものが含まれよう。

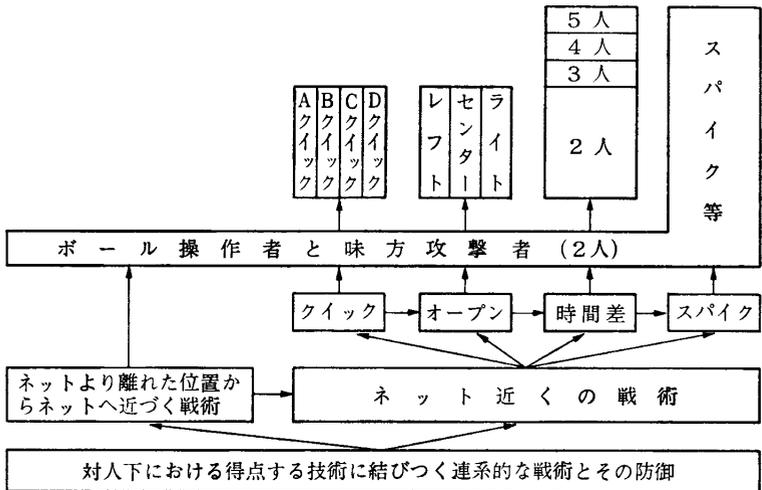
- i サーブ
- ii ダイレクトトス, あるいは, ダイレクトレシーブ, ネット上のワンタッチボール等のスパイク攻撃
- iii ブロック

iv 自チームのレシーブボールをスパイクする二段攻撃

② 攻撃の基本形態—〔Ⅱ〕（仮称）

攻防の関係において、2対2から2対1の状態を作る攻撃形態で、これは自チームのトスを伴う、ボール操作者とこれにかかわる味方攻撃者の攻撃形態である。この攻撃形態を攻撃の基本形態—〔Ⅱ〕と仮称する。現在のバレーボールでは、レシーブ、トス、スパイクの三段攻撃が一般的であるので、換言すれば、攻撃の基本形態—〔Ⅱ〕が多用されているといえよう。

攻撃の基本形態—〔Ⅱ〕を原理、原則にして、バレーボールの攻撃の戦術体系化を試みると、次のようになるろう。



図③ 攻撃の戦術体系

IV. ま と め

現在日本で行われている、バレーボールの種々な攻撃法を系統的にとらえるため、まずバレーボールの本質的な特性を追求し、これを「対人下における、得点する技術に結びつく連系的な戦術とその防御」としてとらえた。

そしてバレーボールの戦術体系については、バレーボールの戦術を、ネ

ットより離れた位置からネットに近づく戦術と、ネット近くの戦術に分類し、特に後者では、ボール操作者とこれにかかわる、味方競技者について、攻撃の戦術の体系化の視点を6項目にわたりとらえ、これらに基づいて、バレーボールの攻撃の戦術を、クィック法、オープン法、時間差法、の順に位置づけた。

このように本研究は、これまでの攻撃の戦術のとらえ方と異なり、バレーボールの戦術の高度化を志向する、攻撃の系統的な追求であり、これまでにわが国や、諸外国において見られない、戦術の体系化であるので、これからの攻撃の各技術の研究や、それらの把握、ならびにそれらの指導に寄与できると思われる。

しかしこの攻撃の戦術体系は、本質的な特性や、戦術の体系化の視点に、まだまだ一考の余地があるのではないかと思われるので、今後、これらについて更に研究し、より一般化され、客観化された攻撃の戦術体系を、志向したいと考えている。